
君恋う日々 I'll be by your side

minimone

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君恋う日々 I'll be by your side

【Nコード】

N6494G

【作者名】

minimone

【あらすじ】

One's sinmost thoughtsのスピノフ。颯太の幼馴染み翔と結衣のお話。小さい頃からずっと一緒にいた翔かけると結衣。幼馴染みだからこそ縮まらない距離。スレ違いに涙するのは、翔なのか結衣なのか・・・そんな二人の甘く切ない物語

P r e f a c e (前書き)

このお話は、One's inmost thoughtsのメインキャラ颯太の幼馴染み、翔かけると結衣の物語でスピノフです。
上記の作品を読まずとも、全く問題ありません。

P r e f a c e

あゝ何もかもがグチャグチャだ。

頭がグチャグチャ

気持ちもグチャグチャ

涙で顔がグチャグチャ

いつその事、この世界すべてグチャグチャになってしまえばいいのに・・・

自分の中にデリート機能が付けれるなら、今すぐ付けたい。
消してしまいたいのは、

あなたの存在なのか、あなたとの思い出なのか、今見た事実なのか、それとも自分なのか・・・

いつまでも『在る』と思っていたものは、幻想で、
いつまでも続くと思っていたものは、幻だった。
聞こえていたはずの崩壊の音に耳を塞いでいた。

揺るぎないものが壊れていく。
壊れるのなんて、ほんの一瞬。

これまで築いてたものを一瞬にして無に帰してしまう。

何もかもがグチャグチャだ。

全て壊れて後に残った『もの』は、温かなもの。
それを掬い上げ、大事にしまっておこう。

誰も触れる事のない奥底に。

何もかもグチャグチャだ。

それでも私は自分の足で立っていよう。

足下の瓦礫には目を向けず、大きな傷跡に気付かない振りをして笑おう。

涙と絶望を隠し、いつもと変わらずにいよう。

第1話 崩壊行進曲1 遠雷 (前書き)

性的描写がありますのでご注意ください。

第1話 崩壊行進曲1 遠雷

遠くでゴロゴロと音が聞こえる。

この音は、ただの雷なのか、何かが崩れる音なのか、それさえも分からない。

それを見かけたのは本当に偶然だった。

晴れていた青空は、昼過ぎぐらいから曇りだしパラパラと雨が降りだした。

雨粒が大きく傘がバリバリと音がする。

このままでは本降りになりそうな雨足に、母親に使いを頼まれた叔母の家に早く行くために通った近道。

数m先を1つの傘をさしながら歩いてる二人を見かけた。

特に気になった訳じゃないけど、女の子と一緒にいる男の子は部活帰りなのか制服で背が高く、身長差があるなって思ったぐらいだった。

すぐに前にいる二人の事を意識の外に外し、早くこの道を通り抜けようと足早に歩く。

近道であるこの道を通らない理由。

それはこちら辺はホテル街が近くて少し治安が悪い、女の子一人でいないほうがいいって言われてる所だったから。

ふと見ると前の二人が角を曲がるのが見えた。

その道につながるのは、ホテル街。

制服でよく行くなって思ってた少し目をやっていると、ホテルに入ろうとするする女の子と目があった。

彼女の顔を見て驚いた私は、思わず歩くのを忘れて立ち止まってし

まった。

そんな彼女は、私と目が合つと相手の男の子の袖を軽く引つ張るのが見える。

それに気付いた男の子が、彼女の方を見た。

傘から見えた男の子の横顔に、私の足は根っこが生えた様に動かなかった。

彼女を見た男の子は、どこかいたわる様な手で彼女の頭を撫でる。それを彼女は嬉しそうに微笑んで、男の子の腕に腕を絡ませる。

二人はそのままホテルに入って姿が見えなくなる最後の瞬間、彼女がもう一度振り返ってこっちを見た。

その瞬間、足に生えてた根っこを雑草を抜く様になんとか持ち上げ歩き始めた。

さつきよりもスピードをあげて歩いて、少しでも早くここから離れたかった・・・

遠くで聞こえた雷が徐々に近づいているのか、音が大きくなってきている

隣に眠る男を起こさない様にそつとベッドから抜け出て、床に放り出されてた下着と洋服を集める。

ホックを留めたブラの締め付けがなくなった。

振り向くと横で眠っていた男が起きていた。

「もう帰るの？」

上半身を起こし、私の腰を自分の方に引き寄せてキスをする。そのキスに答えながら、それは徐々に深くなっていく。部屋には二人が出すクチュクチュという音が響く中、外のゴロゴロという雷が私の中に反響する。長いキスが終わり、唇を離す。

「夕食までに帰らないと・・・」

男から視線を外しながら、さっき外されたブラのホックをつけ直しながら答える。

ふくと気のない返事をしながら、男は再度ブラのホックを外し取り去ると、ベッドへ押し倒す。

「まだいいだろ？雨まだ強いし、もう少し休憩しよ」

上から覆いかぶさった男は、キスをしながらしっとりしている白く柔らかい曲線を描く膨らみに手をもっていき強弱をつけながら揉むキスを止め男は下へとさがっていくと、すでにピンと立っている頂きに口を含む。

口の中で飴でも食べているかの様にコロコロと転がす。

もう片方も、指で強弱をつけながら摘んだり、潰したり、こねてみたりしている。

今度は責めるのを逆にし、あいている右手が腰を舐める様に行ったり来たりさせながら、ジワジワと足の付け根へと降りていく。

「んっっ・・・」

さっきまでの余韻も手伝って、すでに敏感になっていた蕾を撫でられ声が漏れる。

男は胸への愛撫を止め、唇を耳元へもっていきと囁く。

「気持ちいい？もつと欲しいだろ？」

何も言わない事に特に気にするでもなく、男は股へと顔を埋め舌で愛撫を繰り返す。

指を奥へと埋め込み、忙しく動かし刺激を送る。

自然と息があがり、甘い声が響く。

「結衣・・・俺のも、気持ちよくして・・・」

そう言つて、結衣の向きを変えると反り勃つものを口元に持つていき、お互いがそれぞれのものを愛撫し合う。

途中男は口を離し起き上がり、そのまま結衣に愛撫させる。

「・・・あ・・・そう。・・・い、いいよ・・・結衣・・・」

快樂の声を出しながら、男は結衣の頭を撫でる。

結衣も、口の中で男のものが大きくなるのを感じる。顎がダルくなつてきたが、我慢して愛撫を続ける。

「ゆ・・・い・・・上手に、なった・・・ね。・・・もつと、強く吸いながら・・・舌を使って・・・」

男に言われた通り、少し強めに陰圧をかけながら舌を細かく動かす。

「んっ・・・！そ、そう・・・きもち、いいよ・・・」

口と手を使いながら愛撫を続けていくと、男は突然結衣の口から自身を抜き出し、結衣を仰向けに押し倒した。

「もつ我慢出来ない」といいながら、性急に結衣の中へと入っていく

ると腰を振る。

体を知り尽くしている男は、結衣の弱い所を責め立てる。

「あつ、・・・うんつつ・・・ダ・・・メ・・・」

快樂の高波が結衣を襲ってくる。

男は結衣に後ろを向かせ腰だけを上げさ、バックからも責め立てる。男に揺さぶられながら、視線をベット下の床にやる。

そこにはピアスが片方落ちていた。

男の荒くなっている息と卑猥な水音が結衣に落ちてくる。

目から溢れるのは、生理的な涙なのか、それとも・・・

マンションのエレベーターを降りて、フロアーを歩いていると奥から見知った姿出てきた。

相手も、結衣に気付いたらしく近づいてくる。

「結衣、今帰り？」

無言で頷く結衣だったが、怪しまれない様に相手を見上げて問いかける。

「翔は？これから出掛けるの？」

結衣に尋ねられた結衣の幼馴染みの翔は、DVDを見せながらもつ

一人の幼馴染みである颯太の所に行くと言った。

一緒にくるかという誘いを断る。

翔に自分の動揺がバレていないか、ドキドキする。

「おばさんが心配してたぞ。お使いに出して帰ってこないって……
っってお前泣いてたの？」

結衣の頬に涙の後があることに気付いた翔は、結衣の肩を掴む。

笑って誤摩化そうとした結衣は、肩を掴まれたと同時に「触らないで!!」と言って、翔の手を振り払った。

「ごめん。ホント、何でもないから……」

そう言っつて、走り出し家の中へと帰っていった。

「ただいま」と玄関で言うとすぐに、結衣は自分部屋へと入っつていった。

部屋のドアを閉めた途端力が抜け、その場に座り込むと膝を抱えて泣いた。

ただ昼間見た光景と床の上のピアスが結衣を苛む。

降っていた雨はいつの間止んでいたが、いつまでも木霊するのは、
遠くで聞こえる雷音

第1話 崩壊行進曲1 遠雷（後書き）

君恋う日々をお読みくださって有り難うございます。

こちらは、他の作品のスピンオフのお話です。

なぜか私のイメージでは、君恋う日々の方が暗くエッチな気がします・・・あれ？設定年齢は、あきらかに他作品の上なのに。

もう一方を既読の方は大枠で内容をご存知かとは思いますが、詳細を楽しんで頂けたらと思います。

皆さんのご意見、感想はお待ちしています。

第2話 崩壊行進曲2 崩壊の兆し

私には、二人の幼馴染みがいる。
小さい頃から三人一緒によく遊んでた。

何時からだっただろう。

この小さな幼馴染みという世界が外へと広がっていったのは・・・

私の幼馴染み二人 霜織颯太 と 沢井翔 は、とても目立っていた。

甘く優しそうな顔をしていた颯太と、それとは対照的に男らしく落ち着いた顔立ちの翔。

身長が高くて、小学校の時からミニバスをしていた二人は周りの女の子から人気があった。

そんな二人と仲の良かった私は、必然的に女の子から羨ましがられたけど、

皆が言う様に二人を特別に思った事はなかったし。

このまま三人の関係が続くと思っていたんだ。

中学校に入ると、それまで私と身長が変わらなかった颯太はグングン伸びてきて、

『可愛い』から『カッコイイ』に変わった颯太はとてもモテた。

そして、中学に入って初めての夏休みから颯太は変わった。

いつの間にか彼女が出来ていて、私や翔と会う機会が極端に減っていった。

それを寂しいと感じたけど、仕方がないとも思った。

颯太は夏休みが終わって、間もなく彼女と別れた。

それからの颯太は、あまりいい噂がなかった。
色んな女の子と付き合っては、すぐに別れる。
それを繰り返してた。

もう一人の幼馴染みの翔。

翔も女の子に人気があった。

颯太とは違って翔は彼女を作るわけでもなく、バスケ一筋だった。
急に変わってしまった颯太に、少しでも戸惑いを感じていた私は小
学校の時と変わらない翔に安心していた。

私たちの生活はズレていつて三人で遊ぶ事もなくなった。

それでも、学校の廊下や家の近くで会う幼馴染み達は、変わらずに
接してくれた。

なんでだろうね・・・少しずつ遠く感じはじめた幼馴染み。
それでも翔は側に居てくれた。

私が、嬉しいとき、悲しいとき、辛いとき、苦しいとき、泣きたい
とき・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6494g/>

君恋う日々 I'll be by your side

2010年10月9日04時02分発行